

中国古代出土文字資料の基礎的研究

A Fundamental Study of Excavated Script in Ancient China

角谷 常子*

Tsuneko Sumiya

はじめに

本研究は、中国古代の出土文字資料について網羅的に収集・整理し、それらを歴史研究に活用する際の問題点を抽出し、展望を示すことを目的とした。今回対象とした出土文字資料とは簡牘と石刻であるが、それは以下のような理由による。

まず簡牘は、近年における質量両面での飛躍的というか驚異的增加がその理由である。どこでどんな内容のものがどれくらい出ているのか、そうした現状を正確に把握するだけでも少なからぬ労力が必要となっている。そうした基礎的情報をまとめて紹介したのも出始めてはいるが、出土物は自分の目で写真（できれば実物）を確認し、報告書を読まねば実感はつかめない。何万点にもものぼる簡牘資料群ともなれば、その基礎的分析だけでもかなりの時間を要することになる。雲夢秦簡の出現で法制史研究が大きく進展し、上海楚簡の出現で思想史の書き換えが進行中であるように、簡牘ぬきには中国古代史研究のフロンティアは語れない現在、その網羅的把握は必須である。

一方石刻は、特に中国において、長い石刻研究の伝統に立脚しつつ、墓葬研究や儀礼研究の成果、さらに諸外国との比較など、新たな視点を取り入れた研究が進展しているように思われる。それは画像石（碑）研究においても同様である。大部で網羅的な資料集が出版されたり図版が復刊されているのも、必ずしも純粋学術的要請による現象とはいえないにしても、そうした研究動向と無関係ではないだろう。しかし、そうした新たな研究においても、モノをもって利点は十分に生かされていないように思われる。文字資料として以前に、木や竹と同様、石をモノとしてとらえた、新たなアプローチを試みたいと考えている。

研究の概要

一 簡牘研究

近年、懸泉置木簡及び張家山漢簡を用いた個別研究を行ってきた。その成果として「秦漢時代における家族の連坐について」（富谷至編『江陵張家山二四七号墓出土簡律令の研究』朋友書店2006年）及び「算題の配列について」（張家山漢簡『算数書』研究会編『漢簡『算数書』—中国最古の数学書—』朋友書店2006年）を発表した。その内容についてはそれぞれの論文を参照していただくこととし、ここでは簡牘資料の整理の過程で気づいたことを述べておきたい。

近年、簡牘資料は質量両面で驚異的に豊かになった。近十年に出土あるいは図版が発表された秦漢時代の簡牘の数は、それまでの2倍にのぼる。これに戦国楚簡や三国呉簡を加えると、今や簡牘総数は30万点になろうとしている。数だけではない。その内容も実に豊かになった。つい十年ほど前までは、簡牘を論じる際、出土場所によって辺境出土簡と内地出土簡の大きく二つに分けるのが一般的であった。それは、

辺境出土簡＝敦煌・居延出土約3万点の簡牘群。軍事拠点出土。内容豊富。前漢後半～後漢初期。木簡中心。

内地出土簡＝各地の墓中出土。内容は遺策・書籍・曆が中心。戦国～六朝。竹簡・木簡。という、比較的明瞭な特徴があったからである。しかし、状況は一変した。いわゆる辺境出土簡から紹介しよう。

まず1990年～1992年には敦煌と安西の県境にある懸泉置遺跡で2万3千余枚の簡牘が発掘された。これは置という駅伝施設遺址から出土したという点で重要な資料である。ただしその内272枚についての釈文が出版されただけ（『敦煌懸泉漢簡釈粹』2001年）で、図版はほとんどが未発表である。未発表といえ、1973～1974年の調査において肩水金閼で出土した1万1千枚以上の簡牘があることを忘れてはいけない。金閼は辺境に設置された、決して大規模なものではないけれども、歴とした閼所である。つまり金閼出土簡は、閼所遺址出土としては唯一の貴重な簡牘資料群なのである。次に、2005年には『額濟納漢簡』が出版された。これは1999年～2002年に内モンゴル額濟納旗の漢代烽隧遺跡の調査で得られた簡牘500余枚の図版である。

一方内地出土簡をみると、いわゆる尹湾漢簡がある（江蘇省連雲港市東海県尹湾出土。1993年発見。図版は『尹湾漢墓簡牘』1997年出版。木簡24枚・竹簡133枚。前漢晩期）。これは地方行政や地方官僚制度に関わる資料として注目されるものである。また秦簡でいえば、3万6千点にのぼる里耶秦簡をあげねばならない（2002年湖南省龍山県里耶鎮の古井戸出土。図版はほんの一部が『里耶発掘報告』2007年に載るが、大部分は未発表）。また漢初では張家山247号墓出土簡（1983～1984年発掘。図版は『張家山漢墓竹簡〔二四七号墓〕』2001年。約1千点。）がある。次に秦漢の前後の時代のうち戦国期における大きな資料群としては楚簡がある。具体的には望山楚簡・包山楚簡・郭店楚簡そして上海楚簡がそれで、これらだけでも総数は約2万8千枚弱になる。そして最後は三国呉簡という巨大な資料群である。1996年、湖南省長沙市の走

馬樓街にある古井戸から発掘された。その総数は無文字簡も含めて14万ともいわれる桁違いの資料群である。現在、順次図版が出版されているが、全容が明らかになるのはまだ先のことであろう。

以上、近年得られた簡牘をごく簡単に紹介したが、未発表のものも含め、その量の多さは目を見はるものがある。しかし単に従来のもと同質の資料が増えた、というだけではない。時期、地域、そして内容が豊かになったことで、研究状況も大きく変化したのである。

まず地域をみてみよう。楚簡という言い方がされるように、戦国時代の楚の地域でひとつの資料群ができています。1975年に発掘された雲夢秦簡（湖北省）や1981年発掘の九店東周墓（湖北省）、1989年発見の龍崗秦簡（湖北省出土。約300点。法律関係中心）、上述の張家山漢簡（湖北省）、里耶秦簡（湖南省）、そして三国呉簡（湖南省）など、ここ30年の間に発見された、ある程度まとまった、かつ重要な簡牘資料はいずれも湖北省かそれに近い湖南省から出土しているのです。しかもその時代は、戦国から秦そして漢初へとつながり、さらに少しとんで三国呉となる。三国呉簡を除けば、これらは全て墓葬出土簡であり、その内容を見るといずれも法律関係文書が出土しているだけでなく、少なからず暦や占関係の書（日書）も含んでいるという共通性がある。従ってこれらの簡牘の分析から、湖北地域の政治・経済の状況を、戦国から漢初にかけて追うことが可能であるし、当地の思想・習俗などを知る手がかりともなる。このように湖北地域は、数だけでなく、一定期間連続して簡牘が出土しているという点でも、非常に魅力的な、一大墓葬簡牘出土地域なのである。

ただ、戦国～漢初の墓で簡牘が出土した墓は、湖北・湖南両省に多い、換言すれば戦国～漢初の墓でも他地域では簡牘を伴わないことが多い、という偏りがあることも覚えておく必要があるだろう。ちなみに法律関係文書もこの地域に集中しているが、他地域では簡牘を伴う墓そのものが少ないためか、法律関係文書も出土していない。ちなみに法律関係文書は、前漢中期以降の墓からは湖北・湖南両省も含め、ほとんど出土していないといってい¹⁾。

上記の偏りをもう少し全体の中で確認しておこう。若干データは古いですが、藤田高夫氏が作成した墓葬出土簡牘一覧によると²⁾、簡牘を副葬するのは、戦国中期頃から始まり、秦をへて前漢期いっぱいではほぼ終息する。一方地域的には、湖北・湖南両省が中心であるが、前漢中期頃以降は、主な出土地が山東・江蘇両省に遷り、後漢期には甘粛省などの辺境に若干見られるのみとなる³⁾。

このように、やはり戦国～漢初においては、簡牘を伴う墓そのものが湖北地域にかたよっていることが確認できる。しかもその内容として、遺策のような、時期・地域ともに比較的普遍的に見られるものだけでなく、法律関係文書のような、他地域では見られない簡牘が副葬されているのである。

従来、簡牘を副葬するのは全国的に見られる現象だという、暗黙の前提というか、むしろ錯覚があったように思う。しかし実際には、上述のような偏りがあることを念頭に置かねばならない。今後は地域という視点を取り入れた分析・研究も必要となろう。また、簡牘一般という扱いではなく、その内容、即ち法律文書・書籍・帳簿類など、死生観とも関連して、それら

が副葬された意味を問い直し、地域的要素も勘案しながらその変遷をたどる作業を行わねばならないと思う。

二、石刻研究

従来、石刻流行の原因は、後漢時代における禮の実践重視の風と、推薦による選挙制度によっておこった、いわゆる過禮現象の一つとして説明されてきた。そもそも墓前に碑を立てて死者を顕彰するなどという行為自体、禮の規定にはなく、立碑の流行を過禮現象の中で理解することに異論はない。しかし、後漢末以降しばしば立碑が禁じられるが、それは禮にない行為だからではない。また、故吏たちが集まって碑を立てたからといって、それで推薦が得られるほどの行為であるとも思えない。さらに約束事を記した石など、禮や選挙とは無関係な石の存在をどう説明するのか、といった疑問も生じる。刻石流行は、単なる過禮現象の一つとしてとらえるだけでは不十分なのである。

そこでまず、なぜ石なのか、ということから考えはじめようと思う。つまり石を、メッセージ（意思）を載せるための書写材料、即ちモノとしてとらえ、木や竹といった他の書写材料との対比において、その機能と意義をあらためて問い直す。その上で、禮にもみえない「顕彰のための碑」なるものを生み出し、批判されつつも誇張や欺瞞に満ちた文章を石に刻み、ささいなことでやたらと人を褒めることを欲する社会とはどのような社会なのか、また立碑を禁じた権力は何を志向していたのか、といった問題を明らかにしていきたいと考えている。

そのためには、正確で完全な資料を網羅的に収集・整理することが何より重要である。ここで敢て「正確」「完全」というのは、石刻資料の場合、ほとんどは出土状況不明・拓本や著録のみ・原石が失われたり所在が変遷したもの、だからである。さらにかなりデータが揃っているものでも、それは文字のある部分だけで、文字のない背面・側面、碑首の形状などについては全く不明なものも少なくない。まして周辺の施設や伴出物に関するデータに至っては絶望的である。こうした著録・報告状況自体、刻石がいかに文字内容だけにしか注目されてこなかったかを物語っている。だからこそ現地での調査が是非とも必要となるのである。

山東における石刻調査

昨年は、いくつかの石刻集中地域のうち、山東において調査することができた。期間は8月11日～17日の実質五日間。主な調査地及び施設は、沂南漢墓、銀雀山竹簡博物館、臨沂市博物館、孔廟、曲阜碑林、鄒陽博物館、任城王墓、武氏祠、済南教育局漢碑亭、孝堂山郭氏祠、山東省博物館、石刻芸術博物館、山東大学博物館、山東省考古研究所、臨淄古車博物館、青州博物館である。全行程、中国社会科学院歴史研究所の先生に同行ねがい、各方面への便宜を図っていただいた。調査の主な目的は、①現在拓本と著録のある石刻の内、拓本ではわからないデータ、即ち碑首の形状、文字のない部分の状態、そして石そのもののサイズのデータを取ること。②墓と祠堂と碑がそろっている点で非常に貴重な遺跡である、武氏祠及び孝堂山郭氏祠を

調査すること。③現地の発掘担当者から石碑や墓の伴出物や周辺の状態について情報を得ること。の三点であったが、これ以外にも山東省は画像石墓の集中する地域でもあるので、未発表の画像が見られるかもしれないという期待も抱いていた。

調査に当たっては、『漢代石刻集成』（永田英正編 同朋舎 1994年）中の山東出土石刻及び武氏祠・沂南漢墓の報告書のコピーを基本資料として持参し、現物を見ながら、そこに記されたデータを確認・補正し、新たなデータを追加してゆくという作業を行った。

真夏の、ほとんど風の通らない建物の中はまさにサウナ状態で、孔廟のような観光地でさえも、碑林の中はほとんど人影はなかった。私が調査している時も、いつの間にか同行の研究者や現地の担当者たちは姿を消し、みな外へでて木陰で涼んでいた。石碑はそもそも屋外に建てて置くものではあるけれども、二千年以上前の貴重な文化財だから、屋内に保管されているのは当然であろう。しかし、済南教育局漢碑亭などは、訪れる人もあまりないのか、あちこちにネズミの糞が転がり、クモの巣が張って埃がつもった狭い建物に、漢碑の有名どころががざらりと並ぶという、文字通り「有り難い」状況であった。その蒸し暑くて薄暗くて狭い堂内に黙然とたたずむ碑の前後左右を、体をよじりながらサイズを測り、文字を追った。とにかくさまざまな感慨を抱きつつも、目的としていた碑はほぼ実見することができた。以下に、新たに得られた情報を記す。

1、鹿孝禹刻石

拓本は文字のある部分のみであるが、石の下部には文字が刻されていない部分が約50cmある。石の厚さは24cm。

2、□臨爲父作封記

石は縦56cm横85cm厚約34cmのほぼ直方体ではあるが、刻字面の反対側の石面はでこぼこできちんとした形にはなっていない。

3、上谷府卿墳壇刻石・祝其卿墳壇刻石

石全体の形は2の作封記や葉子侯刻石（18）とよく似ているが、祝其卿墳壇刻石の横が98cmと、作封記よりはやや大きめである。

4、乙瑛碑

碑の両側には唐草模様のような図柄がある。無首（円とか圭のような首の部分がなく、ただの四角い石という意味）。厚19.5cm。

5、孔君墓碣

最大厚約28cm。

6、韓勅碑

円首だが無額。

7、孔宙碑

厚24cm。石の角は面取りしてある。円首。

8、孔謙碑

厚22cm。碑陰にも暈あり。碑のてっぺん部分も暈の彫刻で盛り上がっている。

9、史晨碑

厚22.5cm。非常に低い円首で、首の部分の石面は磨かれたようには見えない。

10、孔彪碑

厚26.5cm。

11、孔褒碑

厚23cm。穿あり。

12、魯相謁孔廟殘碑

厚25.5cm。上下残。

13、北海相景君碑

圭首。厚19.5cm。穿は文字を刻してからあけたもの。

14、鄭固碑

厚21cm。陰なし。

15、武榮碑

厚25cm。

16、魯峻碑

厚24cm。

17、鄭季宣殘碑

厚22cm。石の通高約2m。上から83cmの所に穿あり。円首。暈あり。

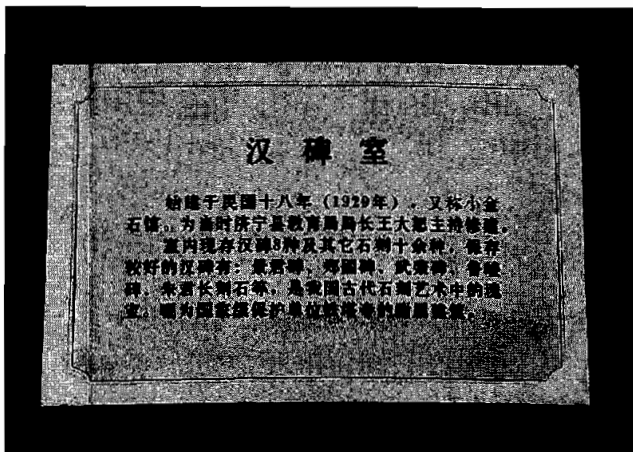
18、萊子侯刻石

石全体は低い四角柱のような形だが、かなり不規則な形をしている。

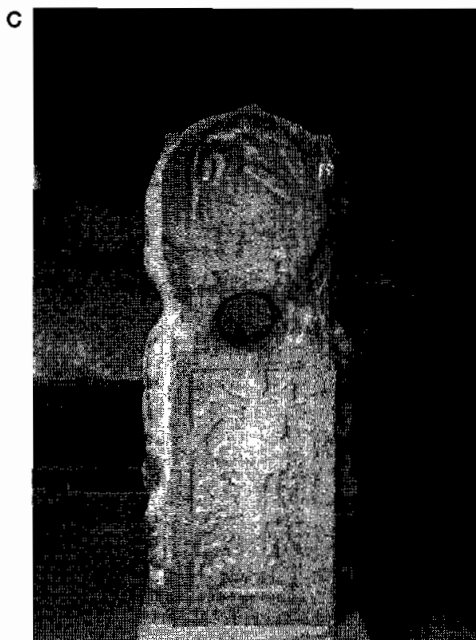
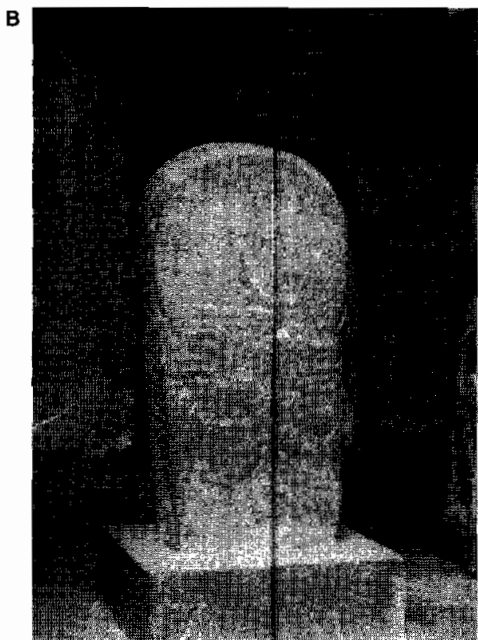
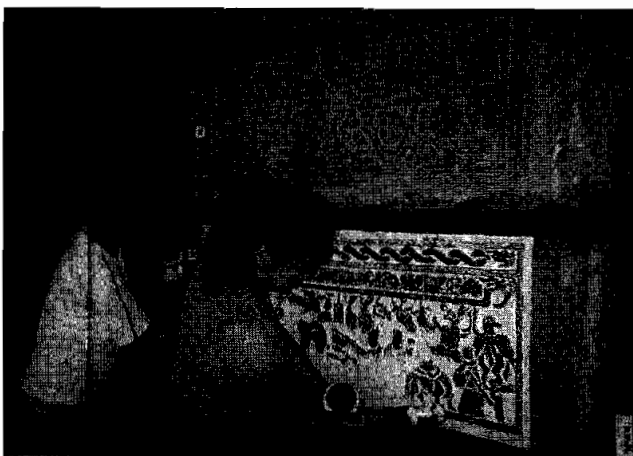
以上に示した石碑のサイズのうち、特に厚さを記したのは、碑の再利用ということが気になったからである。碑を作るには相当手間がかかるであろうから再利用するに越したことはない。実際、碑や他人の墓石を再利用した墓がいくつも知られている。一体再利用されたために薄くなった石碑というのがあるのだろうか。またそもそも一般的な碑の厚さはどれほどのものか、が知りたかったからである。今回データが得られた上記の十数例について言えば、孔君墓碣が最大厚28cmと、若干厚めであるのを除けば、ほぼ20cm～25cmの範囲で、特に薄いものや厚いものは見られず、再利用の問題はよくわからなかった。ただ厚さのデータは著録はもちろん、発掘報告書などにもほとんど載らないので、今後はこうしたデータも積み重ねてゆきたいと考えている。

次に上記以外の刻石について得られた情報として、山東省莒県西孟莊廟墓出土の「宋伯望刻石」が山東省石刻芸術博物館に所蔵されていることを報告しておきたい。ここを訪れた時、出迎えてくれた研究員の楊氏は、館内ではなく「収蔵庫を見せる」と言って中庭にあるごく簡単な建物（やや大きな物置場のような感じ）に案内してくれた。その扉を開けると、この石が薄暗い空間のど真ん中に所在なさげに座っていたのである。これは自然石の四面に刻字したもの

旧濟南教育局漢碑室



臨沂市博物館 (A·B·C)



で、殺人事件にからんだ地界の確定のために立てられたらしく、内容も形もやや特殊なものなのである。宋伯望刻石は所在不明とされていたため、今回の調査ではリストにあげていなかった、いわばノーマークの刻石であったので、当初この石を見た時はそれとは気付かず、未発表の刻石かと思っていた。楊氏によると、この石の近くには石闕や巨大な石人像も立っていたという。祠堂の存在は不明だが、ある程度の広さの墓域があったようで、宋氏は当地の豪族だったと考えられよう。ともあれ、全くの偶然ながら、所在が確認できたことは思わぬ収穫であった。

画像石

最後に画像石に関して得られた知見も記しておく。一つは鄒城博物館に展示されていたものである。臥虎山出土と書かれており、柱を横に寝かせたような横長の画像石で、底面以外全ての面に画像があった。墓か祠堂を構成する石であろうが、一体どの部分に用いるのかはよくわからない。その画像の中に初めて見る図柄があった。橋の上を一台の馬車とその後ろに馬に乗った人物が二人続く。しかし馬車と騎馬の間で橋が崩れ落ち、馬車はそのまま行くが、騎乗の一人は馬もろとも川に落ち、助けてくれと手を伸ばしている。橋の上からはもう一人の騎乗の人物が、助けようと手を差し伸べているが、川には彼以外にも二人ほど溺れている人がいる。この画のストーリー（馬車の進行方向）は向って左から右に進んでいるが、画面左端には、右方向に行こうとする男性を両脇の女性が泣きながら腕をもって止めているような場面が描かれている。まるで、「この世とあの世は容易に渡れない川で隔てられているのです。悲しいけれどもあの世のお父さまやお母さまのもとへは行けないのですよ」とでもいうように。

かつて信立祥氏⁴¹は、後漢晩期画像によく見られる、橋上交戦図と墓主車馬渡橋図を以下のように解釈した。現実の人間世界と地下の鬼魂世界は河で隔てられている。墓主が車馬で橋を渡るの、地下世界にいる墓主がその河を渡って人間世界に建てられた祠堂にやって来ることを表しているのだ、と。人間世界と地下世界が河で隔てられていることは「漢代以前の文献記載には何も手がかりが見当たらない」（信氏書250頁）。にもかかわらず氏がこのように考えた根拠は、『太平広記』所収の説話であった。そこには、地獄から流れ出る血潮からなる奈河という、人間世界と地下世界を隔てる河が見え、古代人はその河を罪人が転落してしまう恐ろしい河だと考えていたのだという。ただ、仏教の影響を強く受けた隋唐期の説話を、そのまま漢代画像の解釈に持ち込むのは少々無理があった。しかしこの臥虎山出土画像石には、あの世とこの世を隔てる河と、その河で溺れている人が描かれている。まさに信氏の説を裏付ける画像といえよう。

地下世界と人間世界が河で隔てられていて、生者は決して渡ることができないという考え方は、竪穴墓を作る際、地下水が湧き出て、時としてその処理に苦慮することがあったであろう人々にとっては自然な発想であろう。臥虎山画像石も、溺れているのは罪人ではなく、容易に渡ることのできない河を無理に渡ろうとしたために橋が崩れ落ちた人であろう。

なお残念ながら、この画像石は図版その他の書籍では発表されていないようで、博物館でも写真撮影は禁止されていた。

今ひとつ、山東省博物館に展示されていた「糧囤図」と題する後漢時代の画像石（長清県孝里鎮大街村出土。縦54.5×横244×厚54.5）を紹介する。この画像も向って左から右に進行する。左端に倉庫のような建物がある。倉庫の前に二人の男性がもち手のついた大きな樽のような容器をはさんで向かい合う形で描かれている。左の一人は手に細長い棒を四～五本持って立っている。

もう一人はやや腰をかがめて容器に何かを入れようとしているような手つきである。彼は口に何かをくわえているように見えるが、何かわからない。この二人の画の上には「量穀」という題記があるので、おそらく倉庫から穀物を出して、決められた分量ずつ分けようとしているのであろう。彼らのさらに右側には、容器の中に棒を一本突き立てた状態で、取っ手を持って容器を抱えるように運んでいる人物が二人ほど描かれている。この棒は、分配先あるいは穀物の種類や量などが書かれた木簡ではないかと想像するが、もしそうだとすればこれまで知られていなかった木簡の使い方である。山東出土の画像で、こうしたテーマの図は管見の限り初めてで、おそらく未発表のものと思われる。もちろん、撮影禁止である。

おわりに

これまで、現地調査の結果を中心に石刻および簡牘についての基礎的考察について述べた。今回は限られた調査ではあったが、痛感したことが二つある。一つは、既発表の情報が限られたものであるということ。これは中国に行くたびに思うことではあるが、やはりモノを持たない者のつらさである。例えば、博物館の庭に、高さ1 m程度の、簡単な模様のみで刻字のない穴のあいた石が置かれてあるのを見たが、まさに馬を繋ぐ石（犠牲を繋ぐ石が碑の起源の一つとされる）である。こうした石の報告は見たことがない。また、「安国祠堂題記」として知られる石刻と同じ形式の石が数多く出土していることも知った。しかし、いずれも文字がないためか、発表されていないようであった。

いま一つは、拓本だけでは、石が立てられていた環境どころか石そのものも見えていない、ということである。これも頭ではわかっていたことなのだが、やはり現地で見ると今まで抱いていたイメージが大きく崩れることもしばしばである。

かように我々の知る情報は限定的なものである。情報不足を補い、モノと情報を持たない不利をどのように跳ね返すかは、これまでもそしてこれからも課題でありつづけるであろう。しかし簡牘研究において、モノをもつ国では生み出せなかった研究成果を日本の研究者があげてきたように、それは必ずクリアできると思う。その一つの試みは、石を書写材料としてとらえることであると考えている。何に何を書くのかといった書写の歴史には、当該時代の社会・政治・思想が反映しているはずである。そもそも古代人にとって石はどのような存在で、どのような目的で用いられ、また文字が刻されるようになったのか。さらにその延長線上にあるはず

の後漢の立碑流行にはどんな背景があり、どのような社会的意味があったのか、そうした問題意識をもって、甲骨以来の文字資料の中に石刻を位置付けること、これが当面の研究課題である。

注

- 1) 前漢宣帝期の青海省上孫家寨漢墓からも軍事関係の法令が出土しているが、この墓の出土簡牘は「孫子」など、軍事関係のものが集中するという特徴がある。
- 2) 藤田高夫「秦漢時代の簡牘資料」(『古代文化』43巻9号 1991年)を参照した。
- 3) 上記以降に簡牘が出土した主な墓葬として、閔沮秦漢墓(湖北省。占関係・曆譜など。『文物』1999年6期)、隨州孔家坡前漢墓(湖北省。前漢早期。曆譜・日書。『文物』2001年9期)、新蔡平夜君墓(河南省。戦国中期以降。占関係。墓主は楚人。『文物』2002年8期)、虎溪山漢墓(湖南省。前漢前期。日書・美食方など。『文物』2003年1期)などがあるが、いずれも上記の結論の範囲に入る事例ばかりである。
- 4) 信立祥『中国漢代画像石の研究』(同成社 1996年)第六章第三節。